

イエスのことば 第 64 回 神の国に入ることについて

すると、ある人が言った。「主よ、救われる人は少ないのですか。」イエスは人々に言われた。「狭い門から入るように努めなさい。あなたがたに言いますが、多くの人が、入ろうとしても入れなくなるからです。」 (ルカ 13 : 23～24)

□文脈の確認

1. イエスの公生涯を起承転結の四部構成に分け、背景を理解しながら学ぶ。
 - (1) 起：紀元 26 年秋の受洗から翌年春メシア宣言を経て宣教開始まで (第 1～9 回)
 - (2) 承：メシアとしての権威を現わすも指導者層の拒否を受ける (第 10～33 回)
 - (3) 転：紀元 29 年春から弟子訓練、秋の仮庵の祭りの後、信者の家々を訪ねて旅
 - (4) 結：紀元 30 年 4 月、エルサレム入城・十字架・復活、復活から 40 日後に昇天
2. 転の部：紀元 29 年春から翌年 4 月 1 日まで
 - (1) 春から秋までの半年、異邦人地域へ 4 回の旅行 (第 34～48 回)
 - (2) 紀元 29 年秋 10 月、仮庵の祭りの前 (第 49 回)
 - (3) 仮庵の祭りにて (第 50～55 回)
 - (4) 仮庵の祭りの後 (第 56～63 回)
 - (5) 冬 12 月、宮清めの祭りにて (第 63 回)
 - (6) 翌年 4 月 1 日までの約 3 か月の間にて

信者の家々を訪ねて旅
3. 翌年 4 月 1 日までの約 3 か月の間にて (第 64 回～)

- ① ユダヤ地方を離れてヨルダン川の東側、ペレヤ地方に退く (ヨハネ 10 : 40～42) 神の国に入ることについて (ルカ 13 : 22～35)

 - ② 招待客たちに断わられた大宴会のたとえ話 (ルカ 14 : 1～24)
 - ③ キリストの弟子として歩むための心得 (ルカ 14 : 25～35)
 - ④ 罪人に対する神の態度 (ルカ 15 : 1～32)
 - ⑤ 富に関して：不正な管理人のたとえ話、ある金持ちと乞食 (ルカ 16 : 1～31)
 - ⑥ 使徒たちへの教え：赦し (ルカ 17 : 1～4)・奉仕 (ルカ 17 : 5～10)
 - ⑦ ラザロをよみがえらせる：ヨナのしるし 1 回目 (ヨハネ 11 : 1～54)
 - ⑧ ヨナのしるしを拒絶されたことに対して (ルカ 17 : 11～37)
 - ⑨ 祈りに関連する二つのたとえ話 (ルカ 18 : 1～14)
 - ⑩ 離婚についての教え (マタイ 19 : 1～12、マルコ 10 : 1～12)
 - ⑪ 神の国に入ることについての教え (マタイ、マルコ、ルカ 18 : 15～17)
 - ⑫ 永遠のいのちについての教え (マタイ、マルコ、ルカ 18 : 18～30)
 - ⑬ イエスの死についての予告三回目 (マタイ、マルコ、ルカ 18 : 31～34)
 - ⑭ 盲目の人たちの癒やし (マタイ、マルコ、ルカ 18 : 35～43)
 - ⑮ 神の国のプログラムに関する教え (ルカ 19 : 1～28)

□アウトライン 「神の国に入ることにについて」

1. ヨルダン川の東側、ペレア地方に退く（ヨハネ 10：40～42）
2. 神の国に入ることにについて（ルカ 13：22～30）
3. パリサイ人たちがイエスをユダヤ地方へ戻そうとした（ルカ 13：31～35）

1. ヨルダン川の東側、ペレア地方に退く（ヨハネ 10：40～42）

40 節 そして、イエスは再びヨルダンの川向こう、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた場所に行き、そこに滞在された。

- ヨルダンの川向こう（東側）・・・ペレア地方。ユダヤ議会サンヘドリンの管轄外。ユダヤの指導者たちはイエスをメシアではないと拒否し、イエスを暗殺しようとしていた。民衆も指導者たちに従い、イエスを秋と冬の祭りの 2 度にわたり、石打ちにしようとした。そのような動きからイエスは身を引いて、ユダヤ議会サンヘドリンの権限が及ばないペレア地方に行き、その地方の信者の家々を滞在先としながら、旅を続けた。
- 滞在先は、あらかじめ七十人の弟子たちの派遣によって準備されていた。
- そこは、イエスの公生涯のスタートとなった場所、洗礼者ヨハネからバプテスマを受けた場所であった。

41～42 節 多くの人々がイエスのところに来た。彼らは「ヨハネは何もしるしを行わなかったが、この方についてヨハネが話したことはすべて真実であった」と言った。そして、その地で多くの人々がイエスを信じた。

- 旧約聖書の預言書の最後はマラキであるが、旧約時代の最後の預言者は、洗礼者ヨハネである。
- ヨハネは奇跡を一度も行わなかったが、イスラエルの人々はヨハネを預言者として認め、その教えによる影響は大であった。
- そのヨハネがイエスをメシアであると証言した。ペレア地方に住んでいたイスラエルの人々はヨハネの証言をはっきりと記憶しており、ヨハネの証言とイエスが示してきたしるしに基づいて、多くの人々がイエスをメシアであると信じた。

2. 神の国に入ることにについて（ルカ 13：22～30）

- (1) エルサレムへの旅（ルカ 13：22）

22 節 イエスは町や村を通りながら教え、エルサレムへの旅を続けておられた。

- エルサレムへの旅・・・エルサレムへ直行する旅ではない。春の過越の祭りにエルサレムに着くように、それまでの間は、70 人の派遣により定まった各地の滞在先を巡る旅。

(2) ある人（おそらく弟子のひとり）からの質問（ルカ 13 : 23a）

23 節 a **すると、ある人が言った。「主よ、救われる人は少ないのですか。」**

- この質問の意図は、個々人の救いについてではなく、イスラエルの民族的救いについてである。イスラエルが民族として救いを受けて、神の民として回復されるとき、そしてメシアの王国がスタートするそのとき、救いを受けてメシアの王国に入ることのできる人は、イスラエル人全員ではなくて、一部の少ない人に限られるのか、という質問。
- この質問が出てきた背景は、先の宮きよめの祭りにおいて、群衆がイエスを石打ちにしようとしたことである。

(3) イエスの応答：質問した弟子だけでなく、まわりの人々に（ルカ 13 : 23b～24）

23b～24 節 **イエスは人々に言われた。「狭い門から入るように努めなさい。あなたがたに言いますが、多くの人が、入ろうとしても入れなくなるからです。**

- **狭い門**・・・イエスをメシアとして信じること。この信仰によってのみ、救われてメシアの王国に入ることができる。
- **努めなさい**・・・救いを努力して得よという意味ではない。救いは、神の恵みによるものであって、人の努力や行いによるのではない。しかし、当時の信者は、ユダヤ社会から追放されて社会的経済的に苦境に立たされる危険があった。信者となるには、覚悟を決めて実生活での苦境に対処せねばならない。その意味での「努めなさい」である。
- **入れなくなる**・・・救いを受けるまでの時間的余裕はいつまでもあるわけではない。ここでイエスが語っているタイムリミットは、エルサレム陥落・神殿崩壊の時である。それは、イエスをメシアではないと拒否した当時の世代が神から受ける裁きである。その裁きの中で肉体の死を迎えるとき、多くの人々がイエスを信じないままで死んでいく。彼らは、ユダヤ教パリサイ派の教えに従い、イスラエル人であれば、皆が救われ、復活してメシアの王国に入れると思っている。それは、広い門、広い道である。それが滅びにつながることを死後に知っても、もはや取返しがつかない。多くの人々がメシアの王国に入れなくなるのである。

(4) 当時のあの世代のイスラエルの人々が神の国に入るためには、タイムリミットがあることについてのたとえ話（ルカ 13 : 25～27）

25～27 節 **家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってから、あなたがたが外に立って戸をたたき始め、『ご主人様、開けてください』と言っても、主人は、『おまえたちがどこの者か、私は知らない』と答えるでしょう。すると、あなたがたはこう言い始めるでしょう。『私たちは、あなたの前で食べたり飲んだりいたしま**

した。また、あなたは私たちの大通りでお教えてくださいました。』しかし、主人はあなたがたに言います。『おまえたちがどこの者か、私は知らない。不義を行う者たち、みな私から離れて行け。』

- 家の主人・・・イエス
- 戸を閉めてしまって・・・タイムリミットがあるということ。紀元 70 年のエルサレム陥落まで。
- あなたがた・・・当時のあの世代のイスラエルの人々。
 - 彼らは、イエスが神から遣わされ、神の霊によって奇跡を行ったのに対し、その奇跡は悪魔の力によるものだ、イエスは悪霊に憑かれていると拒否した。イエスはこれを「聖霊を冒瀆する罪」と呼んできびしく断罪した。
 - この罪に対する神のさばきは、当時のあの世代のイスラエルの人々の上にくだる。それが、紀元 70 年のエルサレム陥落である。イエスを信じない者たちは、エルサレムに集まり、陥落に巻き込まれて死ぬことになる。
 - 肉体の死は、信仰によって救いを受けることができる期間の終了である。よって、当時のあの世代のイスラエルの人々にとって、救いを受けるタイムリミットは、個人的にはもちろん肉体の死のときであるが、当時のあの世代のイスラエル人全体としてはエルサレム陥落のときである。

(5) パリサイ派が教える「広い道」では、神の国に入ることにはできない（ルカ 13:28）
28 節 あなたがたは、アブラハムやイサクやヤコブ、またすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分たちは外に放り出されているのを知って、そこで泣いて歯ざしりするのです。

- アブラハムやイサクやヤコブ・・・イスラエル民族の先祖 3 代。イスラエルとはヤコブに神が与えた名。ヤコブの 12 人の息子たちからイスラエル民族の十二部族が出た。旧約聖書の第一巻、創世記に記されている。
- すべての預言者たち・・・旧約時代の預言者たち
- アブラハム、イサク、ヤコブ、そして旧約時代の預言者たちは皆、イエスの再臨後、メシアの王国が始まるまでの 75 日間の間に復活する。幸いなる「第一の復活」（黙 20:5~6）にあずかる。
- しかし、そこには、ユダヤ教パリサイ派の教えに従っていたイスラエルの人たちの姿はない。彼らは幸いなる第一の復活にあずかることなく、よってまた、メシアの王国に立つこともない。

- (6) イエスが教える「狭い門」を選んだ人たちが、東からも西からもやって来て神の国に入る (ルカ 13 : 29~30)

29~30 節 人々が東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。いいですか、^{あと}後にいる者が先になり、先にいる者が後になるのです。

- 人々が東からも西からも、また南からも北からも来て・・・イスラエルの地の東、西、南、北は、異邦人地域を指す。よって、多くの異邦人が、イエスを救い主として信じ受け入れる。そして、その異邦人信者たちがメシアの王国に入り、アブラハムたちと一緒に、メシアの王国建国を祝う食卓に着席する。
- 後にいる者が先になり・・・「後にいる者」とは、天の神との関係では遠くに離れていた異邦人を指す。「先になり」とは、イスラエルの民族的救いよりも先に、多くの異邦人が救いを受けて信者になり、全世界に福音が宣べ伝えられるから。それは、狭い門であるイエスを信じて、異邦人が救いを受けるからである。
- 先にいる者が後になる・・・「先にいる者」とは、天の神との関係では神の民として選ばれ、育てられてきたイスラエル民族を指す。「後になる」とは、天の神が遣わしたお方であるイエスを拒否したために、イスラエルの民族的救いが、異邦人の救いの後になることを意味する。

兄弟たち。あなたがたが自分を知恵ある者と考えないようにするために、この奥義を知らずにしてほしくはありません。イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、こうして、イスラエルはみな救われるのです。

「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬虔を取り除く。これこそ、彼らと結ぶわたしの契約、すなわち、わたしが彼らの罪を取り除く時である」と書いてあるとおりです。

彼らは、福音に関して言えば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びに関して言えば、父祖たちのゆえに、神に愛されている者です。神の賜物と召命は、取り消されることがないからです。

(ロマ 11 : 25~29)

3. パリサイ人たちがイエスをユダヤ地方へ戻そうとした (ルカ 13 : 31~35)

- (1) 見せかけの忠告 (ルカ 13 : 31)

31 節 ちょうどそのとき、パリサイ人たちが何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここから立ち去りなさい。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」

- ヘロデ・・・ガリラヤ地方とペレア地方の領主。洗礼者ヨハネを逮捕拘束して、獄中で殺した人物。
- 殺そうとしています・・・これは偽り。イエスを殺そうとしているのは、

ユダヤ地方にいる指導者層。パリサイ人の意図は、イエスをペレアから立ち去らせて、ユダヤ地方に戻るよう仕向けること。

(2) イエスの応答 (ルカ 13 : 32～33)

32～33 節 イエスは彼らに言われた。「行って、あの狐にこう言いなさい。『見なさい。わたしは今日と明日、悪霊どもを追い出し、癒やしを行い、三日目に働きを完了する。しかし、わたしは今日も明日も、その次の日も進んで行かなければならない。預言者がエルサレム以外のところで死ぬことはあり得ないのだ。』

- あの狐・・・ヘロデを指す。狐は狡猾さを表現する。ただし、原語は「雌の狐」なので、ヘロデの妻ヘロディア (マタイ 14 : 3～11) を指しているかもしれない。洗礼者ヨハネを殺した首謀者はヘロディアであった。
- 三日目に働きを完了する・・・死んで三日目に復活することを暗示
- 預言者がエルサレム以外のところで死ぬことはあり得ない・・・直訳すると「預言者が死ぬ場所として最もふさわしいのはエルサレムである」、イエスはエルサレムで死のうとしている。イエスはパリサイ人たちの心の内を見抜いていて、【見せかけの忠告などする必要はない。言われなくても、わたしはペレアを立ち去り、ユダヤに、そしてエルサレムに行き、そこで死ぬ】と言う意味で言われたのである。

(3) エルサレムに対する嘆きのことば (ルカ 13 : 34～35)

34～35 節 エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。見よ、おまえたちの家は見捨てられる。わたしはお前たちに言う。おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

- おまえたちの家・・・エルサレムの神殿を指す。神殿は、本来は、「わたしの父の家」(ヨハネ 2 : 16) であるが、ここでは、もはや神の家ではなく、不信仰な人たちの家と呼ばれている。
- 『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』・・・将来のイスラエル民族全員が心から悔い改めて、イエスをメシアとして信じ認め、天におられるイエスに向かって、地上に帰って来てくださいと祈り願うときのことば。この信仰によってイスラエルの民族的救いが成就し、イエスが地上に帰る。これがメシアの地上再臨である。
よって、メシアが地上再臨するための条件はひとつ、イスラエルの民族的救いである。大患難期の末期に、この時が来る。